２０１５年度　アッセンブリー　３番テーブル　総評

ジャッジ：岡本一真(日本大学４年)

メンバー：杉野谷(青学２)、西山(東洋３)、後藤田(立教３)、衛藤(武蔵３)、村上(日大３)、三原(立教３)、五十嵐(明治２)、由良(フェリス２)、米村(東洋３)　　※順不同

１．初めに

本年度のアッセンブリーにおいて３番乙テーブルとして位置付けられたこのテーブルであったが、残念ながらあまり良いテーブルとは言えず乙ーが出ない、いわゆる「全落ちテーブル」に近いものであったことをまず申し上げたい。その理由として議論を評価する際に用いられる「進度」と「深度」の２つの指針が著しく不十分だったことがあてはまる。詳しくは後述するが、Practicability の確認で議論が終了したこと及びそれまでに検証されたアイディアがほとんどなかったことによりテーブルを評価し得る材料が少なかった。

しかしながら結果として乙ーを選出することになり、衛藤（武蔵３）が選ばれる運びとなった。

２．議論の大まかな流れとコメント

＜Narrowing＞　１８分

後藤田の narrowing、西山、衛藤、杉野谷、後藤田の４名がオピニオンプレゼンターに立候補。各々の考えるコンパリソンのイメージやＤＡに関して質問が交わされた後、Voting によって衛藤がオピニオンプレゼンターに選ばれた。

（コメント）差別化及び理解を深めるために質問を行っていたのは良かったが、そのやり取りから「テーブルメンバー全員がコンパリソンに進みたい」ということはほぼ自明であったためテーブルで停滞が起こったときに、それを用いて何かしらのサジェスチョンを打つことも１つの選択肢であったと思う。

＜ＡＳＱ＞　１時間２２分

ＴＧや精神的苦痛の特徴や性質など、またＡＤなどＳＱにはあまり関連性の見られない

ものやオピニオンプレゼンターのスタンスについても質問が行われた。また Reason for Cause について西山が「ドナーの家族を尊敬しているから」という一例をコンセンサス(以下 コンセ)にした。ＡＳＱを通して何度か停滞が起こるも衛藤と杉野谷、次いで後藤田が介入し収束させていた。ＮＦＣではタスクを確認するのみで反論はなかった。

（コメント）時間の掛け過ぎである。あくまでＡＳＱはＡＳＱだ。もちろん、ときどきＡＳＱから派生して深みのある議論になったりするケースがあるため、時間を掛けるべきでないと言い切るのは安直かもしれない。しかし今回ＡＳＱで行われたＱＡのほとんどがコンパリソンを前提としたものであったことから、結果論ではあるが意味のないものになってしまった。また今回、ジャッジをしていてなんとなくテンポの悪さを感じた。「ＡＳＱはコンパリソンを見据えてオーソリティを築く機会である」というのが筆者の考えではあるが、このテーブルではそこまでオーソリティを築いた人物がいなかったことが後の大きな停滞を招いた一因である、と思っている。

＜Direction・Mandate・＞　１５分

ドナーを脳死者のみに絞る理由などについていくつか質問が行われた。

（コメント）特になし。

＜Practicability＞ １時間５分

まず初めに西山と村上がオブジェクションを持っていること、村上の意図はコンセを取ることなので stop dis をゴールとした西山のオブジェクションから話すことが決まる。西山のアイディアは「ソクラテスの唱えた医療倫理の概念に政策が反するため法的実効性が無い」というものであった。ロジックのアウトラインを確認した後に西山がコンセを取る方向にゴールを変更したため、他のテーブルメンバーは反論ではなくコンセを取りたい部分やその影響について理解するアプローチに切り替えた。結果としてＤＡで話すこととなった。次に村上のアイディアに移る。村上はＤＡだけでなくシチュエーションコンパリソンも取り入れたいとする意図を見せたが、これにより各テーブルメンバーの理解度と方向性が一致しなくなる。シチュエーションコンパリソンの方法論や３impact コンパリソンとの結び付き、あるいはＤＡの内容を確認、さらにＤＡがイメージしにくいといったダウトなど異なったアプローチがテーブル上に現れ大きな停滞を招く。時間を要した後、衛藤と杉野谷により praca ではＤＡのみのコンセに絞ることになる。結果、村上のアイディアは

ＤＡの１つとして認められるも、ここで時間終了となった。

（コメント）このエリアにおいて、最大の失敗と言えるのは”Taking concensus”を尊重し過ぎたことであろう。そもそもコンセを取る作業はタスクの観点から見れば不必要なものである。また筆者の個人的な意見であるがコンセを取ることは費用対効果の面でも有用とは言い難い。まずコンセを取るためにはそれ以前のエリアでいくらか時間を割かねばならないし、コンセを取ったことによる効力も不明でありテーブルによっては意味のないものになるかもしれない。(例：コンセを取ったＡさんとコンセを取らなかったＢさん、ＤＡプレゼンターに選ばれたのはＢさん) 結局、特にＤＡ立論などのためのコンセは１つの手段であり決して目的ではない、ということをもう一度考えてみてほしい。そういった意味では今回ゴールがコンセだとわかったロジックの取り扱いに終始し、そこで終わってしまったのは非常にもったいなかった。「時間がないので君たちのアイディアをしっかり話すためにコンセ無しで、そのエリアに向かいましょう」といったシンプルな提案は誰にでもできたはずである。このように議論を進めるためにもタイムマネジメントの意識が必要だと筆者は考えている。

３．順位と選定理由

１位　衛藤（武蔵大学３年）

チャートやプレゼンの技術が高く、オピニオンプレゼンターとしてスムーズなＱＡや的確なカンファメーションを行っていた。しかしながらＱＣで終わってしまい議論を進めるサジェスチョンが素早く出てこなかったこと、またオピニオンプレゼンターながらＡＤ立論ができずに終わってしまったことは大きな課題である。基礎的な能力は完成されていると思うので、今後は後輩の指導に邁進してほしい。

２位　杉野谷（青山学院大学２年）

介入量が多く他者の話に積極的に介入していた。議論の停滞が起こった際にＱＣのみならずサジェスチョンにより収束させようとする意識は見えたが、そのサジェスチョンの浸透率が低く(ジャッジ目線から見れば的を得たものが多かったが)テーブルメンバーに内容や意図が伝わっていない、もしくは通るまでに時間を要する場面が多かった。どんなに良い発言をしてもテーブルメンバーに伝わらなければ意味がないので、今後は自分の考えを伝える能力を磨いていってほしい。

※今回、１位の衛藤と２位の杉野谷は点数上、非常に僅差だった。ただ、杉野谷は「Workability にオブジェクションがある」という意思を事前に見せていたものの結局Workabilityに進むことなく時間切れとなってしまったため、杉野谷のアイディア次第では結果が変わる可能性はあった。いずれにせよ、それまでに時間を掛け過ぎたことが問題である。

３位　後藤田（立教大学３年）

伝わりやすいＱＣを軸に介入していたが上位２名と比べると介入が限定的であったこと、サジェスチョンがほぼ無かったこと、また後藤田自身のアイディアは発されることがなかったためこの順位とした。逆に言えばサジェスチョンによっては上位に食い込めたので、今後はサジェスチョンに重点を置いて後輩へのエデュケーションを行ってほしい。

４位　西山（東洋大学３年）

Ｑ及びコンパリに向けてのコンセンサスを用いて介入していたが、テーブルに影響を与える介入がほとんどなかったためこの順位となった。エリアごとにタスクをＱで確認しており、その取り組みは良かったと思うものの実際にテーブルが停滞した際にそれを用いたサジェスチョンなどが打てず結局Ｑのみで終わってしまっており、もったいなかったと言える。後輩へのエデュケーションでは「ＱＣで引き出したものをＳにつなげる」ことを教えられるとより良いはずである。

５位　村上（日本大学３年）

ＤＡ及びシチュエーションコンパリソンを行うためのコンセンサスを通じて介入していた。しかしながら他の場面で介入することは全くなかったため、５位となった。今後は自分のアイディアを話すだけでなく、他者の話にも介入できるようプレパレーションを積んでほしい。

※コンセンサスに関しては上で述べたため、ここでは村上のアイディアについて一言添えたい。彼のＤＡアイディアは「日本政府の政策によって左翼的な人々が暴動やテロを起こし日本が崩壊する」というものであった。Japan collapse というアイディアは医療問題だけでなく刑事問題などでも目にするため特段珍しいものではないのだが、ここで考えてほしいことは「コンパリソンを行う上でＤＡとしてふさわしいか」といった点である。今回の場合だと①ＡＤと同レベルのものであるか（日本が崩壊する＝誰がどんな被害を被る…？）②テーブルメンバーにとって話しやすい（≒想像しやすいものであるか）　少なく

とも以上の２点は考慮するべきである。ＤＡというのは基本的に投票で決められるため、例えそれがどんなにプレゼンターが深刻・重要であると感じるものでも皆に選ばれなければ意味がないのである。そのため今回、村上もアイディア自体はユニークであったがＤＡとしてふさわしいかと問われれば微妙なところであろう。これからは、どういうアイディアが選ばれるのか・どうやったら選ばれるのかという部分にも着目していってほしい。

６位　由良（フェリス女学院大学３年）　介入が非常に限定的であった。

７位　三原（立教大学３年）
　　米村（東洋大学３年）
　　五十嵐（明治大学２年）　　介入が全く見られなかった。

４．最後に

お疲れ様でした！２年生は１年後までにもっと成長できるように、３年生は後輩たちを全力で支えられるように頑張ってください！！

日本大学４年　岡本一真
LINE ID：kazuma1005
Facebook もやってます
※この総評を読んで聞きたいことやわからないことがあったら是非ご連絡ください！